

令和元年度

工芸品フォーラム

～手から手へ つなぎ育む 美しき伝統～

日時:令和元年8月31日(土)13時30分～

場所:盛岡地域地場産業振興センター

○総合司会 本日は工芸品フォーラムにご参加いただきましてまことにありがとうございます。

本日の司会を務めさせていただきます公益財団盛岡地域地場産業振興センター事務局長、山崎と申します。どうぞよろしくお願いたします。(拍手)

工芸品フォーラムを始める前にお願いですが、お手持ちの携帯電話は電源を切られるか、マナーモードにさせていただきますようお願いいたします。

それでは、ただいまより工芸品フォーラムを開催いたします。

初めに、主催者を代表いたしまして盛岡市商工観光部ものづくり推進課、北田雅浩課長よりご挨拶を申し上げます。北田課長、よろしくお願いたします。

○北田雅浩氏 皆さん、どうもこんにちは。お忙しいところ、工芸品フォーラムに多数ご参加いただきましてありがとうございます。

また、東北経済産業局、菅原課長様初めご来賓の皆様、大変ありがとうございます。

本日のメインとなりますコーディネーターの小笠原さん初め、パネリストの皆さん、お忙しい中ありがとうございます。きょうは、ふだんいろいろ言おうと思っていることとか、ためにためている思いをぜひざっくばらんに語っていただければと思います。

きょうは、工芸品の魅力を皆さんに改めて感じていただきたいということで開催しております。何かしら新しい発見があると思いますので、ぜひ楽しんでいただければと思います。

それから、11月3日からアピオのほうで開催されます伝統工芸の全国大会、11月2日には漆器展のほうも開催されますが、全国開催地をかえている中で平成12年度に盛岡、岩手で開催しまして、今回が2回目ということで、何とかこの大会を開催することになりました。本番まで2カ月余りとなりまして、関係者一丸となって今準備を進めているところでございます。ぜひこの大会を成功させたいという思いも皆さんかなり強いと思いますし、私たちもそのつもりで今頑張っているところでございます。この大会に向けて、機運を高めたいというふうな思いもございますので、きょうのフォーラムを契機といたしまして、皆さんで盛り上げていただければなというふうに思います。

以上、お願いを申し上げまして、主催者を代表してのご挨拶とさせていただきます

ます。本日はよろしく願いいたします。(拍手)

○総合司会 続きまして、本日お越しいただいておりますご来賓の方々をご紹介させていただきます。皆様から向かってご来賓席の左側よりお一人ずつご紹介申し上げます。

初めに、東北経済産業局産業部地域ブランド連携推進課課長、菅原隆平様でございます。

○菅原隆平氏 東北経済産業局、菅原です。工芸品フォーラム開催、どうもおめでとうございます。(拍手)

○総合司会 続きまして、岩手県商工労働観光部産業経済交流課参事兼総括課長、高橋孝政様でございます。

○高橋孝政氏 高橋でございます。本日はおめでとうございます。(拍手)

○総合司会 ご来賓の菅原様、高橋様、お忙しい中ご出席を賜りましてまことにありがとうございます。

それでは、座談会に入る前に少しお時間をいただきまして、受付で皆様にお配りしました資料と本日のスケジュールのご説明をさせていただきます。

まずは、K O G E I E X P Oというチラシが入っているかと思えます。こちらのチラシでございます。こちらが先ほどご紹介いただきました11月3日から岩手産業文化センターアピオで開催されます第36回伝統的工芸品月間国民会議全国大会のチラシでございます。全国の伝統的工芸品が大集合いたします。岩手の工芸品のワークショップやさまざまなイベント等も予定されております。本日お集まりいただいた方々にはぜひこの全国大会にも参加いただければと思います。よろしく願い申し上げます

本日の工芸品フォーラムは、この全国大会の事前の関連イベントに位置づけてございます。

また、参考資料といたしまして、こちらのほうの資料になりますけれども、各都道府県の伝統的工芸品を紹介したパンフレットとなっております。こちらもぜひ参考にしていただければというふうに思いますので、よろしく願いいたします。

それから、工芸品フォーラムのチラシも入っているかと思うのですが、そちらにサブタイトルとして「手から手へ つなぎ育む 美しき伝統」というサブタイ

トルをつけさせていただきましたが、伝統工芸は手仕事、手づくりで、製造工程で職人から職人の手から手へ、つくり手から使い手の手から手へ、つくり手側は親方から次の担い手へ、製造技術とものづくりの思いや美・伝統を、使い手は親から子・孫へ、その伝統工芸品と使い方や味わいを伝え継承していくという思いを込めてサブタイトルといたしました。

それから、本日のスケジュールは、この後座談会を3時ごろまで行って、その後はこの場で交流会を30分ぐらい開催したいと思っております。交流会では、鉄瓶で沸かした白湯やコーヒーの試飲会も行います。終了予定は3時半という予定でございます。

これから座談会を始めたいと思いますが、座談会の司会進行、まとめ役のファシリテーターとパネリストの方々をご紹介します。

初めに、ファシリテーターの小笠原一志様をご紹介します。小笠原様は、1967年に盛岡でお生まれになり、東京デザイナー学院卒業後、東京、盛岡のデザインプロダクションを経て、2002年、HAND DESIGNを開業されました。

主に広告のデザインを中心に、パッケージ開発や広報紙などをアートディレクションされております。2016年盛岡市クリエイティブ育成事業、岩手アートディレクターズクラブ創設プロジェクトの認定を受け、東北初となる地方のアートディレクターズクラブ、岩手アートディレクターズクラブを立ち上げられました。クリエイターのネットワークづくりとレベルアップをすることで地域に貢献できると確信され、岩手アートディレクターズクラブ事務局長として活躍されております。最近では、西和賀町デザインプロジェクト「ユキノチカラ」参加デザイナーとして、どぶろく、西わらびのピクルスなどパッケージ開発を担当されました。

代表作品には、めんこいテレビ「ミットくん」キャラクターデザイン、東北映像シンボルマーク、秋田米焼酎「米蔵」パッケージ開発、みちのく国際ミステリー映画祭1997～2001ポスタービジュアル制作などがございます。

本日の工芸品フォーラムのポスター、チラシ、看板等のデザインも小笠原さんに作成していただいております。

それから、受賞歴は、ハコシヨウ食品工業「呑んべえ漬」パッケージ開発で、2015年いわて特産品コンクール知事賞、2016年岩手ADC賞を受賞、全国広報コンクールで岩手県広報紙「いわてグラフ」が2012年内閣総理大臣賞を受賞、JAGDA

おいしい東北パッケージデザイン展入選、そのほかACC入賞、岩手広告賞、岩手広告美術賞入賞など多数となっております。

現在は、公益社団法人日本グラフィックデザイナー協会会員、岩手地区代表幹事、岩手アートディレクターズクラブ会員・事務局長、盛岡情報ビジネス専門学校デザイン科非常勤講師もなされております。

続きまして、座談会のパネリストの方々を紹介させていただきます。パネリストの皆様は、岩手の伝統的工芸品である南部鉄器、岩谷堂箆笥、浄法寺塗の職人の方々にお集まりいただいております。

南部鉄器からは、タヤマスタジオ株式会社の田山貴紘様、岩谷堂箆笥職人で有限会社中千家具製作所の澤口光雄様、浄法寺塗職人で株式会社うるみ工芸の藤村真紀様、家具ショップホルツオーナー、平山貴士様です。

本来はつる職人で田中鉦工房の菊池翔様、チラシにも載せておったのですが、本日お子様の急病により座談会の参加ができない状況となっております。残念で、大変申しわけありませんが、きょうはここにいる4名のパネリストでの座談会とさせていただきますと思っています。よろしく願いいたします。

ここからは司会をファシリテーターの小笠原様に交代いたします。小笠原様、よろしく願いいたします。

○小笠原一志氏 先ほど山崎事務局長よりご紹介いただきました、工芸品フォーラム座談会の進行役をいたしますグラフィックデザイナーの小笠原一志と申します。よろしく願いします。

では、早速始めさせていただきます。まずは、伝統的工芸品について簡単に説明いたします。岩手県内には経済産業大臣に指定を受けている4つの伝統的工芸品がございます。指定を受けるためには、さまざまな条件があるということで、間違いそうなので、ちょっと原稿を読ませていただきます。

伝統的工芸品とは、伝統的工芸品産業の振興に関する法律（伝産法）で定められました。工芸品の特徴となっている原材料や技術、技法の主要な部分が今日まで継承されていて、さらにその持ち味を維持しながらも産業環境に適するように改良を加えたり、時代の需要に即した製品づくりがされている工芸品ということだそうです。

それからあと、指定を受けるためには法律上5つの条件がありますということ

で、1つ目が主として日常生活で使われるもの、2つ目、製造過程の主要部分が手づくり、3つ目、伝統的技術または技法によって製造（100年以上の継続）ということです。4番目が伝統的に使用されてきた原材料、それから5つ目、一定の地域で産地を形成されているということです。

岩手県内の伝統的工芸品については、南部鉄器、これが指定1号ということですからけれども、昭和50年2月17日、それから岩谷堂箆筒、128号、昭和57年3月5日、それから秀衡塗が149号、昭和60年5月22日、浄法寺塗、150号で、同じく昭和60年5月22日ということで、以上になります。

では、本日の座談会パネリストをご紹介します。県内の伝統的工芸品である職人の皆様、4名の予定でしたが、3名と、それから伝統工芸のよさを生かしたプロダクトデザインとその商品を全国に販売しているショップオーナー1名にパネリストとして本日お集まりいただいております。

では、指定番号順をご紹介します。まず、南部鉄器から、タヤマスタジオ株式会社代表取締役、田山貴紘様です。田山さん、ちょっとお立ちいただいてよろしいですかね。簡単にプロフィールをご紹介します。詳しいプロフィールと作品は、スライドをごらんください。全て読まないで簡単にプロフィールをご紹介しますと思います。1983年3月31日、盛岡市出身。お父様は、南部鉄器伝統工芸士会の会長。埼玉大学大学院修了後、食品メーカーに入社をされます。2013年より田山鐵瓶工房にてお父様に師事。それから、2013年11月、タヤマスタジオ株式会社を設立されました。2016年、日本が誇るすぐれた地方産品「The Wonder 500」に鉄瓶「桜」が選定。2017年8月、上質な白湯を提供する鉄瓶屋kanakenoをリリース。2018年、南部鉄器青年展にて鉄瓶「さくらふぶき」がもりおか歴史文化館長賞を受賞。2019年8月、今月ですね、kanakenoのショップ&カフェ、お茶とてつびんengawaを中ノ橋通にオープンされました。現在は、南部鉄器協同組合の組合員でいらっしゃって、青年部の役員をされています。

では、田山さん、一言ご挨拶をお願いします。

○田山貴紘氏 田山と申します。きょうはよろしくをお願いします。

今紹介いただきましたけれども、南部鉄器の職人を基本的にはやっています。技術としては、きょうもいますけれども、父親から学びながら、ちょっとやりづ

らいですが、つくること以外にもチャレンジしていこうということで、自分で会社を立ち上げて、今さまざまなことをやっています。きょうの時間の中でいろんな紹介ができればなと思っていますので、よろしくお願いします。(拍手)

○小笠原一志氏 ありがとうございました。

続きまして、本来いらっしゃる予定でしたけれども、一応ご紹介だけいたします。南部鉄器からもう一方ということで、つる鍛冶の田中鉦工房、菊池翔さんでした。ちょっときょうはいらしていないのですけれども、同じくプロフィールを簡単に説明いたします。

1984年岩手県生まれ。2007年、岩手大学教育学部芸術文化課程造形コース美術科卒業(金属工芸専攻)。同年4月、盛岡市唯一の南部鉄瓶つる鍛冶、田中二三男氏に師事、田中鉦工房に入職。2019年、田中鉦工房の事業内容を継承する形で、10月1日より「鉦屋」の名称で創業されるということです。岩手県工芸美術協会会員、平成23年度岩手県美術選奨作家ということで、菊池さんがいらっしゃる予定でしたけれども、きょうは残念ながら欠席ということです。

では続きまして、岩谷堂筆筒より、有限会社中千家具製作所、澤口光雄さんです。澤口さん、ちょっとお立ちいただいてよろしいでしょうか。プロフィールをご紹介します。

昭和44年1月生まれで、現在年齢50歳ということです。昭和60年、有限会社中千家具製作所に入社され、長年勤務されていまして、平成24年2月、伝統工芸士に認定されていらっしゃいます。

澤口さん、一言ご挨拶をお願いします。

○澤口光雄氏 澤口と申します。きょうはよろしくお願いします。

中千に入って35年目になります。これからも続けていきたいと思っております。

(拍手)

○小笠原一志氏 ありがとうございました。

続きまして、漆器、浄法寺塗から株式会社うるみ工芸代表取締役社長、藤村真紀さんです。お立ちいただけませんか。それでは、プロフィールをご紹介します。

大学卒業後、実家である株式会社うるみ工芸に就職。全国各地の百貨店の催しにて販売する傍ら、滝沢市にある自社工房で父である現代の名工、勝又吉治氏に師事。平成29年に浄法寺塗伝統工芸士に認定。その年に代表取締役社長として家

業を引き継ぐということになっております。現在は岩手県漆器協同組合の事務局をされているということです。

藤村さん、ご挨拶をお願いします。

○藤村真紀氏 うるみ工芸の藤村と申します。今日はよろしくお願ひいたします。

浄法寺塗というと、ちょっと扱いが面倒なのではないかなんていうイメージもあるかもしれませんがけれども、その辺は敷居を低くしたいなと今日、思ってきました。どうぞよろしくお願ひいたします。(拍手)

○小笠原一志氏 ありがとうございます。

それでは、一般を代表してという形になるのですがけれども、ホルツと、それからラウム、2店舗のインテリアショップオーナーの平山貴士さんです。平山さん、お立ちいただけますか。プロフィールをご紹介します。

1977年、岩手県宮古市生まれ。高校時代にインテリアに興味を持ち、東京目黒のインテリアショップで経験を積み、2004年にホルツを盛岡市菜園にオープンされました。その後、2009年に姉妹店ラウムを盛岡市大館町にオープン。2011年よりホルツ&ラウムでの出張ショップいわてんどの活動をスタートし、年に2回程度の頻度で全国各地でオリジナル商品や岩手のクラフトを紹介しておられます。2015年より東北発の合同展示会エントワインを主催して運営されています。また、近年は走る家具屋、きょうはちょっとTシャツ着ていないですがけれども、走る家具屋ホルツとしてマラソンへの取り組みもライフワークの一部としており、まさに休むことなく走り続けているマラソンジャンキーでもあるとプロフィールに書いております。また、みずからもプロダクトデザインを行いまして、特に岩手の金工、木作家や塗師とのコラボレーションで新たな近代的工芸品とでもいましょうか、プロダクト作品をつくられて、全国で販売されています。

では、平山さん、ご挨拶をお願いします。

○平山貴士氏 ホルツの平山と申します。よろしくお願ひします。

今プロフィールでも紹介いただきましたけれども、僕は皆さんと違って職人ではないので、お店の人というか、きょうは一般代表ということでこの場に立たせていただいています。一応ものづくりをしている人間としては、ものづくりをしていると言うと、職人さんなんですかと言われるのですがけれども、僕は職人ではないので、何もつくれません。ただ、簡単に言うと、つくる部分、物を加工する

部分以外のことは全部やっているという感じですが。職人さんともちょっと違った目線というか、立ち位置からのものづくりをやっております。なので、今日もちょっと直球ではなく、変化球勝負で、少し違った角度から参加できればいいなと思います。よろしくお願ひします。(拍手)

○小笠原一志氏 以上4名のパネリストにお話しいただきたいと思っております。ざっくばらんに座談会を進めてまいりますので、どうぞよろしくお願ひします。

まず初めに、これは翔さんがこういう話できるなということで提案いただいたことだったのですけれども、伝統工芸を仕事に選んだ理由ですね、こちらを皆さんから一言ずつ伺いたいなと思つて、あとは一緒にあわせて、ふだんどういふ感じのお仕事をされているのか、内容とか、いろいろ多岐にわたつてされている方もいらっしゃると思うのですが、割とかいつまんででもいいと思つますので、わかりやすいようにお話しいただければと思つます。

では、こちら側、田山さんからお願ひします。

○田山貴紘氏 私の場合は、大学進学を機に首都圏に行きました。父親が南部鉄器の職人ですけれども、南部鉄器の職人になるというつもりはさらさらなくて首都圏出て、向こうでサラリーマンをやっていたのですが、伝統工芸というのを中から見ると意外と見えにくいのですけれども、僕は幸い外に出た人間なので、首都圏から見た視点、あとは違う商材を扱うサラリーマンで営業職だったので、違う商材を売るといふ視点で見た伝統工芸、もうちょっと拡大解釈すると、世界の中で伝統工芸ってどういふ位置にあるのかなというよふな視点で伝統工芸を見ることができたので、すごくよかつたなと思つます。そういう視点で見ると、伝統工芸、僕の場合は南部鉄器ですけれども、伝統工芸がすばらしいなというこゝに気づいたのです。伝統工芸、南部鉄器をやるつもりは全くなかつたのですけれども、やっぱり外へ出てみて、そういう視点で眺めてみると、世界から見て日本の文化って、言葉が合っているかどうかわからないですけれども、変ですよね。ほかにこういうものづくりしているところってそうそうないので、変なので、今世の中のいろんな仕事をしている方が頭をひねくり回して考えているのが差別化とか、ほかとの違いをいかに出すかということだと思つますのですけれども、そういう意味で変ということがすごく価値だと思つます。そういうことが少しかいま見えたのと、あとやっぱり父親がかなり技術を持っていて、その技術の積み

重ねがこの伝統工芸の肝というか、価値でもあると思うので、そういったものが身近にあったということが大きな理由で、東京から2013年に帰ってきて、この仕事をやっているの、そういったのが僕の理由です。

○小笠原一志氏 たまたま金曜日に別件で工房のほうにお邪魔しまして、取材をさせていただいたのですけれども、息子さんが突然帰ってきたというふうにお父さんがおっしゃっていました。

あと、ふだんのお仕事の内容をお願いします。

○田山貴紘氏 ふだんの仕事は、基本的には職人なので、職人としての技術を向上させて、ものづくりをするというのが基本的なスタンスです。やればやるほど先が見えなくなるこの仕事だと思うので、そこはしっかりしつつも、あとは僕の強みとしては、先ほど少し申し上げたとおり、営業の仕事をしていたというのもあるので、それを生かしたいと考えています。つくり手としてもしっかりしながら伝え手という部分と、あとは使い手という部分が全部成り立って、恐らく商売として成り立つと思うので、そこのつくり手以外の2つをやるためにさまざまな仕事をしていて、先ほどちょっと紹介もいただきましたけれども、中ノ橋通で鉄瓶とかを使った飲食物を出すようなカフェ兼ショップというところをオープンしたりしています。ですので、最近は工房に余りいれずにいろんなところを走り回っているの、なかなかつくるところに集中できてはいないのですけれども、そうやっていろんなことをやっています。

○小笠原一志氏 ありがとうございます。作品づくりはされているのですか、今度の全国大会に関する

○田山貴紘氏 まだやっていないです。

○小笠原一志氏 つくられるご予定でしょうか。

○田山貴紘氏 頑張りたいと思います。

○小笠原一志氏 わかりました。

では続きまして、澤口さん、お願いします。

○澤口光雄氏 私が仕事を選んだ理由は、小さいときから手で何かをつくるのが好きでしたので。

○小笠原一志氏 多分私とほぼ、2つぐらい年違うのですけれども、ガンブラですか、の世代だと思うのですけれども……

○澤口光雄氏 つくりましたね。

○小笠原一志氏 プラモデルはがんがんとつくったほうですね、私も大好きだったので。

○澤口光雄氏 中学校を卒業して、訓練校の木工科に入りまして、1年間学んで、今いる中千家具に就職しましたが、まさか伝統工芸品をつくる家具屋とは知らずに入りました。こういうものをつくるのだと知って、驚きました。俺にやっつけられるのかなと思いました。そんな感じです。

○小笠原一志氏 ふだんの仕事の内容を教えてくださいませんか。

○澤口光雄氏 ふだんは箆筒をつくる専門です。1人6本とか4本とかつくりま

す。

○小笠原一志氏 この間ちらっと工房のほうにお邪魔しまして、金物とかはまた別の方がつくられてらっしゃるということですよ。

○澤口光雄氏 そうです。

○小笠原一志氏 あとは塗りの方がお二人ぐらい社内にいらっしゃると。

○澤口光雄氏 金具つけはまた別でいます。

○小笠原一志氏 まさに箆筒自体をつくる作業をされているということですね。

○澤口光雄氏 はい。

○小笠原一志氏 ありがとうございます。

続きまして、藤村さん、お願いをいたします。

○藤村真紀氏 私がこの仕事を選んだ理由ですが、大学は農学部に入りましたが、みんなと同じようにリクルートスーツを着て、就職の合同説明会なんかに行かなければいけないという状況を迎えたときに何か違うな、これやりたいことではないなというのがありました。家の中でふだんから漆器というのは使っていて、父や祖父がつくっておりましたし、漆の独特のにおい、こういったものもふだんからかいていましたから、すごく身近に漆がありました。私も家業を継ごうとはさらさら思っていなかったのですけれども、やっぱり自分の将来を考えたときに漆なしではいけない、やっぱり好きという、その一言しかなくて、大変な仕事なのですけれども、入ってしまいました。

ふだんの仕事の内容は、つくるほうもやりつつ、今社長業としてみんなに仕事を振り分けたりとか、組合の事務局の仕事も行ってありますが、子供が3人いる

ものですから、3人の子供たちの面倒も見つつ、何が何だかわからない状況で毎日が過ぎていってしまっているのです、記憶もなく一日一日があっという間に通り過ぎていくといった状況です。

○小笠原一志氏 ありがとうございます。

では、職人さんではないのですけれども、なぜ家具屋かということで、平山さんお願いします。

○平山貴士氏 職人ではないので申しわけないのですけれども、僕の場合はなぜお店の人になったか、お店を開いたかという理由になってくると思いますが、確かに今のお店でも南部鉄器だったり、漆という素材、技術にかなりかかわりがありますが、一番最初のお店をやると思ったきっかけは、まるっきり全然関係ないもので、椅子です。一応家具屋ですので、椅子は当然なのですが、木ではありません。もともとアメリカにチャールズ&レイ・イームズというデザイナーがいて、そのイームズというデザイナーが1950年につくったシェルチェアというFRPのプラスチックの椅子みたいなやつなのです。その椅子に高校生のときにめちゃくちゃ興味を持ちまして、もう俺はこれは売るぞ、これ売るお店をやるぞと、そういうところから東京の、さっきちょっと出ましたが、目黒のインテリアショップがありまして、そこのオーナーがどうやら日本に最初に持ってきたらしいというのを雑誌で見つけました。そこに行ったら、イームズ目的で行ったお店には、なぜか南部鉄器が並んでいたという。

○小笠原一志氏 ああ、そうなんですか。

○平山貴士氏 そうなんです。そこで僕は初めて、南部鉄器って岩手に住んでいるときは、正直使ったこともなかったし、実際僕は盛岡ではなく宮古なので、身近でもなかったし、何とも思っていなかったのですけれども、憧れのお店に行ったら南部鉄器があったことに本当にびっくりして、その1年後にはもう、南部鉄器、格好いいっしょみたいな、そんな感じになっていたのです、そんなきっかけはありました、一番最初に伝統工芸と絡むことになったのは。

○小笠原一志氏 そんな飛び込んですぐ会社に採用されたのですか。

○平山貴士氏 最初は入れないです。とりあえず履歴書だけを出して、東京に出て、でもタイミングいいのか悪いのかわからないのですけれども、1年待つて入ることができました。

○小笠原一志氏 粘り勝ち。

○平山貴士氏 そうですね。粘るといふか、東京で生きるのに一生懸命だったので、意外と早かったですけれども。

○小笠原一志氏 一応ふだんの仕事の内容も。

○平山貴士氏 それは、普通にお店で家具とかオリジナルの製品であったり、そこに関しては岩手のものだけではないのですが、さまざまなものを普通に販売しています。

○小笠原一志氏 ありがとうございます。皆さんやっぱりさまざまですけれども、家業だとかいろいろありますけれども、やっぱりものづくりとか、そのものが好きなのかなということでしょうか。多分つくられているものも好きだからこそ、しっかり丁寧につくられているのかと思います。

続いて、次の話題に行きたいのですが、先ほどもちらっと話しましたけれども、田山さんの工房にお邪魔して、撮影のディレクションに行ったのですけれども、ディレクションまでの間、取材の中暇だったので、工房の中を何かおもしろいものいっぱいあるなと思って、いろいろ見ていまして、これをちょっと見ていただきたいのですけれども、私、クラフトフェアみたいなところへ行くと、売っているものよりも什器とかそういうのばかり見ていて、こういうの大好きで、左の写真だと何となくわかりにくいので、こっち画像背景を落として、これ徹夜してやりました。冗談ですけれども。

これすごく感心したのですけれども、照明が裸電球で、ちらっとお聞きしたら、光の影で作業しなければいけないということで、万人に合うライトの仕掛けといふか、ものすごく感動しまして、これ使っている材料がホームセンターで売っているやつなのです、全部。多分想像するに1,500円ぐらいでできるのではないかと思うぐらい安いのですけれども、パーフェクトなのです。これ鉄の棒ですけれども、普通の一番安い鉄骨あそこを1カ所だけ曲げているのですけれども、よくタオルとかかけるパイプ用のブランケットが2つあそこにとまっているだけなのです。そこに刺さっていまして、今上に矢印があるのですけれども、当然180度動くわけですよ。鉄の棒の長さの分、ここに電球があるのですけれども、電球つながっているところにS字フックが入っているのですけれども、このS字フックを動かすことによって棒の端まで行けると、あとはS字フックのところと、あと上

にもちょっとついているのですけれども、洗濯ばさみがついていまして、これで高さを完璧に調整できるのです。これすごいと思って写真撮らせてもらって、これがそれぞれお一人ずつついているのですけれども、お父さんのところにはさらにこの先っちょにもう一本ジョイントがあって、3メートルぐらいですよ、伸ばすと。そういう、本当に感動してしまって、思わず写真を撮って、その後、田山さん、ちょっと何か道具を持ってきてくれませんかということでお話ししまして、つくるときに何か欠かせない道具みたいなものがあるのではないかと考えて、手づくりされている道具もあると思うのですけれども、そういう道具のこだわりとか、その辺をちょっとお話ししたいのと、あと手から手へ、つくり手のこだわりという、手から手へというタイトルにもあるので、例えばお客さんはわからないかもしれないのですけれども、お客さんに渡ったときにも、気づかないかもしれないけれども、こういうことをこだわってつくっていますとか、そういうところをちらっとお話しただければなと思っていました。

私もグラフィックデザイナーなので、今パソコンで大体仕事はできてしまうのですけれども、昔カラス口という道具があって、それで版下のトンボをつくったりしていたのですけれども、普通のロゴマークなんかもそれで作るのですけれども、それ今盛岡情報ビジネス専門学校の学生にやらせているのですけれども、もうそんなのやらなくていいのではないかとみんなから言われるのですけれども、それをやるとその人が全部わかるのです。手で描くものですから、垂直とれないとか、あと線、定規を、普通に置いて定規のところで描くと、定規の間にインクが入ってしまってにじんでしまうのです。何回も言うのです。定規を逆さにして、そらして、そっちで描けと言うのですけれども、それでもやるのです、ビヨーンと。そうすると彼は話を聞いていないとか、そういうのがすぐわかってしまうのですけれども、授業ではそういうことをしているのですけれども。

私が今、最も必要なのは眼鏡です。相当目がよかったのですけれども、ここに来て老眼と、乱視が急に始まって、眼鏡がないとパソコンと携帯が全然見えなくなって、今は遠近両用なのですけれども、眼鏡がめちゃくちゃ欠かせない道具になっています。

ということで、今度はどうしようかな、藤村さんからいってみますか。済みません。お願いします。

○藤村真紀氏 道具ですね、きょう私、道具ということでお持ちしましたけれども、へらです。これ全部自分でつくるのですが、使う漆の量に合わせて太いのか細いのか、あと仕事の内容によっても、形状をちょっと斜めにカットしたりして使い分けします。私、子供のころから見ていて憧れだったのが、このへらを毎回仕事をする前に調整するのです、ペーパーで。ちょっとやってみますけれども、先端をとがらせるということです。こういう作業をしてから実際に漆を使ってつくるのです。この作業が子供のころからすごく格好よく見えてしまって、憧れだったのです。何てことないのですけれども、このへら一つにかける集中力というか、そういうものが見えまして、自分で作業をするようになってからも角度一つによっても、つくるものによっても変えていかなければいけないという繊細なところがあります。今日はこれをお待ちしました。

○小笠原一志氏 ちなみに、材質って何になるのでしょうか。

○藤村真紀氏 これは、いろいろです。木も、これ見ていただくとわかると思いますが、こうやったときにしなりがあるのと、ないのとがあって、いろいろヒバとか使うのですけれども、こっちはかたいへらで、これもひとつのおもしろさではあります。

○小笠原一志氏 それは売っていないのですね、道具は。

○藤村真紀氏 これは、材木屋さんにちょっと頼んで、自分でつくります。かなで削ってから。

○小笠原一志氏 そうすると、塗師の皆さんはつくれると。

○藤村真紀氏 そうですね。

○小笠原一志氏 そうですか。ありがとうございます。

あと、つくっているところのこだわりをお願いいたします。

○藤村真紀氏 こだわりですね、やっぱり漆のものを、きょう実際に会場の左手にもお持ちしましたけれども、漆のものというのは何層にも漆を塗っているのですが、塗っている回数分、間、間で研ぎという作業が入ってきます。そうすることによって、塗っている最中についたごみとか、凹凸を真っ平らにして、できるだけ平らにしていくという作業が研ぎなのですけれども、表面ができ上がって、見たときの美しさはもちろんそうなのですが、下地がすごく重要になってきます。そういったところで、本当にどの工程も下地から下塗り、下研ぎ、中塗り、中研

ぎまでありますが、どの工程も毎回真剣勝負で気が抜けません。

○小笠原一志氏 「あっ」となったりするときあるのですよね、当然に。

○藤村真紀氏 あります。

○小笠原一志氏 そんなときは、修正可能なのですか。

○藤村真紀氏 修正します、そういうときは。やっぱり素材が木ですから、必ず座布団に座って作業するようにします。高い位置から落としてしまうと傷みやすいので、多少落ちても余り問題がないという。

○小笠原一志氏 大丈夫なのですね。

○藤村真紀氏 はい。あぐらとか正座とかで作業します。

○小笠原一志氏 ありがとうございます。

平山さんは、話してみますか、欠かせない道具を。

○平山貴士氏 一応言われたので持ってきました。家具屋っぽくなるのですけれども、家具屋以外でも使うかもしれないのですけれども、R定規、図面を描くときとかに設計屋さんとか入るではないですか。あれを、家具デザイナーの村澤さんという方がつくったやつで、キーホルダーみたいになって、Rが1から12まであるのですけれども、全部木の風合いが違うので、同時に木のサンプルにもなるという、こういう持ち運び可能なキーホルダー風のR定規という。これ結構便利なので、割と持ち歩いたりとか……

○小笠原一志氏 なるほど。R定規以外にも使うということですね。

○平山貴士氏 そうですね、木のサンプルという感じで。例えば使うシチュエーションがそんなにあるかと思うかもしれませんが、例えば今皆さんが座っているパイプ椅子とか、パイプの太さとか、さっきはかってみたら8R、多分16の丸パイプを使っているのだとか、そういう仕事ではないかもしれないけれども、たまにそんなのはかかって遊んだりとかもしています。

○小笠原一志氏 ありがとうございます。

手から手へ、つくり手のこだわりというところでは、プロダクトもやられていると思うので、ちょっとお話しいただければと思います。

○平山貴士氏 プロダクトをつくるときは、僕はつくっていて、デザインはするのですが、デザイナーではないので、本当に自分がつくりたいものをつくっています。意外とこだわりが強いというか、クライアントがいるものではないので、

わりと徹底的にやります。例えば、きょう持ってきたのですが、それこそ南部鉄器の家型のペーパーウェイトなのですからけれども。

○小笠原一志氏 イエモノですね。

○平山貴士氏 そうですね、家型の鋳物なので、イエモノという商品なのですが、これってめちゃくちゃシンプルでないですか。僕も最初につくり始めたとき、シンプルだから普通に簡単にできるであろうと思っていたのですが、逆だったのです。ここまでシンプルだと、逆にすごく面倒くさいことになりますよね、田山さん。なので、シンプルなものほど、こだわりとか、ディテールというか、やっぱり真っすぐ立ち上がらせたいというのが、型から抜くとか、抜け勾配のこととかを考えるとすごく難しい形だったというのがわかって、いろいろ試行錯誤しながら形になったのですけれども、今ちょっとお休み中です。今つくってくれる方募集中です、田山さん。

○小笠原一志氏 勾配はついているのですか、少し。

○平山貴士氏 これは、ぱっと見た分、ついているように見えないと思うのですけれども……

○小笠原一志氏 ちょっとある。

○平山貴士氏 ここにわずかにはついています。ただ、金型というか、プレートを起こしてつくと多分もっとついてしまうはずなので、これ1個1個手で抜いてやっているのです、これくらいにおさまっているというあれです。そこの立ち上がりのラインがうちのこだわりです。

○小笠原一志氏 でも、あればすぐ売れてしまうのですよね、つくれば。

○平山貴士氏 そうですね。今職人さんの都合とかでつくれなくなって2年ぐらいたっているのですけれども、やっぱり今も月に1件くらいは問い合わせは来ます。まだ忘れられてはいないというか。なので、完全に忘れられる前に復活はさせたいなど。

○小笠原一志氏 ということだそうです、田山さん。

それでは、澤口さん、お願いします。

○澤口光雄氏 目の前にあるものが、これはかんなです。これは、一番使います。今現在で7丁持っていますが、ケヤキはケヤキ用で、キリはキリ用で分けて使っています。

- 小笠原一志氏 同じ幅でそれぞれ。
- 澤口光雄氏 同じ幅です。
- 小笠原一志氏 それは、やっぱり切れ味が全く違うということですか。
- 澤口光雄氏 そうですね、高いのはやっぱりいいですね。ちなみに、これは3万5,000円と聞きました。
- 小笠原一志氏 もっと高いのもあるのですか。
- 澤口光雄氏 あります。
- 小笠原一志氏 大体幾らぐらいなのですか、高いのは。
- 澤口光雄氏 10万くらいのもあると聞いた事があります。
- 小笠原一志氏 でも、家具よりは安いですね。
- 澤口光雄氏 これは、伝統工芸士に合格して、会長さんからプレゼントでもらったものです。
- 小笠原一志氏 いいですね。それは大事ですね。
- 澤口光雄氏 ほかに伝統工芸士はおりますが、なぜか俺にだけプレゼントがありました。
- 小笠原一志氏 特別待遇。
- 澤口光雄氏 そうですね。どれだけ期待しているのか。
- こだわっている点は、ケヤキを使っているのですが、ケヤキは木目がすばらしいのです。なるべくいい木目のものを使うようにしています。
- 小笠原一志氏 木目がいいものということですね。
- 澤口光雄氏 ええ、選んで。
- 小笠原一志氏 それは、たくさん材料を買わなければいけないということになるのですか。それとも、いい木目のものを選んで買ってくるのですか。
- 澤口光雄氏 いろいろまざっているのです、買ったやつにも。
- 小笠原一志氏 ということは、全部買わなければいけない。
- 澤口光雄氏 そうです。
- 小笠原一志氏 なるほど。そうすると、使えない材もあるという。
- 澤口光雄氏 使えなくもないですけども。
- 小笠原一志氏 木目が悪いと表には絶対来ないということになる。側面に行ったり、後ろに行ったり。

○澤口光雄氏　そうですね、後ろのほうに使います。

○小笠原一志氏　わかりました。あと何かありますか、木目以外に。

○澤口光雄氏　へこみがでないように、爪はまめに切っています。

○小笠原一志氏　あと、この間お話ししていたときに、すき間が1ミリとおっしゃっていましたが、それはこだわりではないのですか、それは当然のこと。

○澤口光雄氏　当然の事です。引き出しの中側は桐を使っているのです、湿気で膨らむのです。それで、引き出しがあかなくなる事を防ぐためにしています。

○小笠原一志氏　展示品を展示するときにつけて修理とかはあるそうなのですが、販売したものの修理はほとんどないというふうに、この間おっしゃっていましたが、ドアがあかないとか調整ぐらいということで、すごく長持ちですね。

○澤口光雄氏　そうですね。

○小笠原一志氏　すごいなど、この間話を聞いていて思ったのですけれども、修理しないのだ。ということは、つくったら、そのまま次の世代、さらにその次の世代まで使えるというものをつくられているということなのですね。

○澤口光雄氏　はい。

○小笠原一志氏　ありがとうございました。

では、田山さん、お願いします。

○田山貴紘氏　きょう電球を持ってきました。僕、2013年に父親の工房に入って修行を始めているのですけれども、何でこういう電球というか、明かりを使っているか最初わからなかったのです。見た目ちょっと格好いいので、格好つけているのかなと思っていたのですけれども、実はそうではなくて、仕事をしているとよくよくわかってくるのですが、これやっぱり白い光ではだめなのです。白熱電球でなければだめで、なぜかという白い明かりっていろんな波長がまざっているのです。いろんな波長の光がまざっているのです、反射が乱反射してしまうのです。なので、白い光で物を見ると凹凸が見えにくくなってしまいます。逆にこういう赤っぽい白熱電球の光で見るとある程度波長が赤の光に偏っているので、光の反射が方向性が出るのです。そうすると、南部鉄器って荒々しい仕事をしているのかなと想像されている方もいらっしゃると思うのですが、実は結構繊細な仕事で……

○小笠原一志氏　そうですね、すごく繊細でしたね。

○田山貴紘氏　多分何十ミクロンとかの凹凸を目で追いかけてながら表面の風合いを出したりとか、加工したりとかしているのです。その微妙な凹凸が白い光だと乱反射して見えるのです。なので、格好つけているわけではなくて、やっぱり白熱電球を使うことというのは、そういった細かい部分までしっかりとこだわってやる上で欠かせないのだなということがようやく最近わかって、やっぱりなかなか最初はわからなかったことなのですからけれども、欠かせない道具の一つなのかなと思っています。結構南部鉄器の職人が仕事する工房って薄暗いところ多いのですけれども、周りから光が入ってくるとやっぱり見えづらくなるというのもあるので、恐らくそういった理由もあるのではないかなと思いますし、これは多分父親の自信作だと思うのです。恐らく、わからないですけれども。

○小笠原一志氏　だって、これほとんどの椅子のところについていますよね。

○田山貴紘氏　そうですね、一人一人についていて、やっぱり座高も違いますし、僕は結構高いほうですからけれども、座高が違ったりすると、同じところに座ったとしても、それによって位置調整しなければいけなくて……

○小笠原一志氏　そうですね、角度とかもそうですよね。

○田山貴紘氏　そうです。角度と位置によってやっぱり反射のぐあいを調整しながら、凹凸を光で見るのではなくて影で見るといような調整をする上では、これ結構優れもので、最近このよさがわかってきました。今まで余りわからなかったのですけれども、やっぱり新しく入って修行、僕もそんなにまだまだ、修行の身なのですけれども、入って一、二年の人とかはこういう光の扱い方がわからないので、基本的に余り見えていないのです。見えていないと仕事ができないのです。なので、何か技術を習得するとか、いい仕事をするという以前に環境をしっかりと整えるという意味では、やっぱりこれすごく大事な道具なのです。

○小笠原一志氏　私、工房へ行ってびっくりしたのは、デザイナーよりも筆使っていると思って、デザイナー、今ほとんど筆を使わないので。

○田山貴紘氏　そうなのですね。

○小笠原一志氏　筆使わないんです。でも、面相筆とか5本どころの話ではないですよ、1人10本ぐらいの単位で筆が使われていたので、すごいなと思って、本当に細かい作業されていてびっくりしました。

○田山貴紘氏　そうですね。これ終わりが無い仕事と一番最初自己紹介させていただいたときにお話ししたのですが、父親がもう半世紀以上仕事をしていて、例えば筆を使い分けているとか、あとは鉄瓶ってお湯を沸かす道具なのですけれども、お湯を沸かすのにそこまでやる必要ないでしょうということまでやったりするのです。でも、効率的に考えて、その部分を取り除いてしまっているのかということ考えたときに、自分がわからないだけで、もしかしたら何か理由あるかもしれないなと思ったりするとサボれないなと思うので、わけがわからなくてもやると、いつかわかるだろうということなので今やっています。そういうところを一つ一つ積み重ねながら、数え方によるのですけれども、南部鉄器だと型をつかって、鉄を流して、形として鉄の塊ができたのを仕上げるという、ざっくりとそういう工程なのですけれども、大体100工程近くあるとかという方もいらっしゃるのですが、その100ぐらいの工程をサボらずやるというのは意識してやっているところなので、その結果として鉄瓶としてしっかりとしたものができるればいいなと思っています。

○小笠原一志氏　あと、本当はきょう菊池翔さんがいらっしゃったら、作り手から作り手へバトンを渡すことになるので、その辺のお話もちよっと聞きたかったのですけれども、わりと連携ってうまくできるのですか。

○田山貴紘氏　どうなのですかね。やっているのだと思います。要望を言いつつ、やっぱりその中でつくれる制限があったりとか当然だと思うのですけれども、そのやりとりからも学べることってありますし、そこの中で、つるってこれいろんな、きょう皆さんにお渡しの資料にも鉄瓶あると思うのですけれども、つるの印象で全体の印象が変わってきたりするので、例えば高さであったりとか、横への膨らみ方であったりとか、あと細さだったりとか、こういう部分で伝統的に古風になったり、荒々しくなったりもしますし、スマートになってシンプルになって、言ってみれば今風なものになったりもします。そういったところは、例えば僕がつくったそちらの鉄瓶「あかいりんご」があったり、パンフレットとして皆さんにもお渡ししているのですけれども、これもつくるときには、きょう来る予定だった菊池翔君と相談して、意見も聞きながらやったりしているので、そういった意味でうまく連携はとれているかなと思います。

○小笠原一志氏　一回預けてつくってもらえるのですか。

○田山貴紘氏 大体鉄瓶屋さん、鉄瓶をつくる人がある程度形はつくって持って
いって、多分それは人によるのでしょうけれども、そのままつくってという方も
多分いらっしゃるでしょうし、そこから意見聞きながらという人もいると思いま
すし、そこは個々で違うのかなと思います。

○小笠原一志氏 そこがうまくいくかいかないかで結構シルエット変わったりし
ますから、大事ですよ。

○田山貴紘氏 そうですね。多分うまくいかない場合もあると思います。こう思
っていたのにとかというのもあると思いますけれども、それも一つおもしろいと
ころかなと思っています。

○小笠原一志氏 ありがとうございます。

そろそろ、そんなに時間もなくなってきているので、次のテーマに行きたいと
思います。最近は何となくお話を聞いていると展示販売会とか、直接お客様と
接して販売することが多くなっているのではないかなと思うのですが、何
か直接売りに行くためには情報発信をしたりとかしなければいけないと思うので
すけれども、直接会ってやりとりして、質問が多いこと、使い方だったり、メン
テナンスのことだったり、その情報発信をしていらっしゃるかということと、そ
れから直接お客さんから、これってどうやったらいいのみたいな質問をダイレク
トにされていると思うので、その辺のお話をちょっといただければなと思うので
すけれども、藤村さん、かなり販売会に行かれていますと思うのですが、いか
がでしょうか。情報発信の仕方と、それからお客さんから直接言われることと
か、手入れ方法とか。

○藤村真紀氏 情報発信は、ホームページ上でイベント情報を掲載したりとか、
あとはお客様に直接ダイレクトメールを郵送したりとか、あとは今度行くところ
は全国の百貨店ですので、百貨店のほうからの情報発信が主だと思います。

あとは、漆器はやっぱり食洗機、この間お話しされていましたが、食洗
機に使える漆器もあるのですが、基本的にはやはり手洗いをお勧めしています。
中には落として欠けたとかという場合もあるので、そういったときは
お持ちいただいて、うちのほうで半年くらいかけてゆっくり修理させていただ
いております。

あとは、使い方については、私も販売するとき必ず伝えるようにしているので

すけれども、お水の中につけっ放しにしてしまうと漆器はよくないので、食べ終わったら流しにぼんと置いておいていただければ。すぐ洗わなきゃではなくて、次の日洗ってもそれは大丈夫です。

○小笠原一志氏 お水は入れておかないほうがいいのですね、次の日洗うときは。

○藤村真紀氏 そうです。入れないで、そのまま置いていたほうがいいです。目には見えなくても、傷がつきますので、漬け込んでしまうとやっぱりそこから水分が入り込んで、漆を剥がしてしまうという原因になりますから、ちょっと漬け込むのは避けていただいたほうが漆器は長持ちします。

○小笠原一志氏 どうしても煮干しの皮がぴたっとくっついてしまったりとか、そういうときは余りこすらずに、例えばお湯をちょっと入れて流すとか、そういうふうにしたほうがいいですかね。

○藤村真紀氏 そうですね。ご飯粒とか、よく飯椀にされる方もいらっしゃるので、そういうご飯粒のときなんかは中にだけ少しお水でもぬるま湯でも張って、10分ぐらい張ってから洗っていただければ。

○小笠原一志氏 30分ぐらいだったら大丈夫ですかね。

○藤村真紀氏 そうですね。

○小笠原一志氏 わかりました。あとは何かありますか。

○藤村真紀氏 あと、使い込んでいくと、上手に使う方はすごくきれいな艶が出るのです。中にはマットのままがいいという方もいらっしゃって、そういう方はできるだけ拭かないでくださいというふうにお話をさせてもらっているのですが、今の現代社会、すごく皆さんお忙しいと思うのですが、お客様の中には、これ洗うのが楽しいんですという、この手触りが気持ちいいので、洗う時間を楽しませてもらっていますというような声を私と同年代ぐらいの女性からいただいたことがあって、それすごく理想的だなと思いました。仕事に忙しかったり、子育てに忙しかったりされると思うのですがけれども、ちょっと洗う時間に、癒やしではないけれども、そういう時間にもこれからどんどんなっていけばいいのかななんて感じました。

○小笠原一志氏 ありがとうございます。

澤口さんは、直接お会いしたりとかということはあるですか、お客様と。

○澤口光雄氏 配達のと看ぐらいですかね。

○小笠原一志氏 そのときは、何かアドバイスされたりとか。

○澤口光雄氏 手入れの仕方は一応。

○小笠原一志氏 それは、どんな感じで行うのですか。

○澤口光雄氏 基本、から拭きです。濡れたタオルで拭くとベニヤがひび割れるのです。それを防ぐために乾いたタオルで。

○小笠原一志氏 それ以外は何かあるのですか。

○澤口光雄氏 それ以外は特にはないですね。

○小笠原一志氏 簡単ですね。わかりました。ありがとうございます。

田山さん。

○田山貴紘氏 やりとりしていると、南部鉄器はさびるという話をよく聞きます。南部鉄器は持っているのだけれども、さびて、さびたから押し入れに置いていたということを知ることが、結構あるのです。鉄なのでさびることはさびるのですけれども、南部鉄器の職人って、鉄瓶をさびにくくする工程をちゃんとつくって、工程の中に入れていまして、釜焼きというのですけれども、木炭の中に鉄瓶入れて、真っ赤にするのです。そうすると、鉄と酸素が反応して酸化鉄というのが膜としてできあがるのです、鉄瓶の内側に。それが入れた水と鉄が触れるのを防いでくれる役割があるのです。なので、その膜を丁寧につくっていればつくっているほど水が鉄自体と触れないので、膜が間にあるので、さびにくくなるので、やっぱり丁寧につくっている手づくりのものとかはすごくさびにくいのだと思うのです。中をゴシゴシ洗ってしまう人もいますのですけれども、洗わないというのがまず第一のさびないようにするポイントで、あとは使った後、中に水気を残しておかないように蒸発させておく。例えば水を沸かして、沸騰して、お茶を入れたり、紅茶を入れたり、何か使った後は、中のお湯を捨てる。ちょっともったいないと言う方は、ポットにあけるとかして、中を空にしてふたをあけておけば、あとは勝手に余熱で水分が蒸発するので、そうやっておきさえすれば、あとは使えなくなるぐらいさびるということはほとんどなくて、うまく使えば本当に50年とか、それだけ使えるので、そのように使ってもらえばいいのかなと思います。

ちょっと宣伝すると、皆さんの手元にあるk a n a k e n oというブランドを展開しているのですが、そういった声がすごく多くて、こっちも嫌になるので…

○小笠原一志氏 こちらですね。

○田山貴紘氏 これですね、こういう三つ折りになっているものなのですからけれども、実はこのkanakenoというのはサービスを用意して、もうそういったお声聞くの嫌なので、さびたら2回までは無料で直しますよというサービスをつけています。

○小笠原一志氏 それは送料は。

○田山貴紘氏 送料は負担してもらおうのですけれども、修理のお値段はいただかないという形で。

○小笠原一志氏 持っていけば無料で2回まで。

○田山貴紘氏 2回までというのも理由があって……大丈夫ですかね。

○小笠原一志氏 はい。

○田山貴紘氏 1回目は、皆さんが遠慮して鉄瓶を使ってしまうのもちょっと嫌だなと思っています。毎日使ってもらうのが鉄瓶の状態をよく使っていただくのいいので、毎日使っていただきたいので、まず使ってくださいと。そうすると、何かいろんな問題が多分起きると思うのです、使い方がわからなかったりすると。そうしたらさびたりとか、空だきしてしまったりとかする場合があると思うのですけれども、そういった学ぶための失敗みたいなものはこちらで何とかカバーしますよと、職人なので直せますので、カバーしますよというのが1回目。2回目は、やっぱり長年使っていくと、鉄瓶みたいな伝統工芸品全部そうだと思うのですけれども、味が出てくると僕らは考えているのですが、最初の新品よりもちょっと変わってくるのです。僕らはそれを育てるといふうに言っていて、そはが味が出るということで、その変化がいいことだと思っているのですけれども、なかなか味が出過ぎて、もうちょっといい感じに直したいなという場合がやっぱり経年変化で出てくると思うので、そういった場合、1回まで無料で直しますよというのをやっているのです。そうすると、恐らく一生涯うまく鉄瓶を使っていただけと思うのです。商売としては余り一生涯使ってもらおうとよくないのかもしれないのですけれども、使い手の不満というか、難しさというのも何かカバーできればなというので、そういうのもやっていたりします。さっき申し上げた2つのポイントを覚えて鉄瓶を使っていただくとうまく使えるのかななんて思います。

○小笠原一志氏 上手に使うと、翔さんがこの間、ひいおばあさんの鉄瓶をまだ

使っているという、50年ものを毎日使っていると言っていましたね。それだけもつということですよ。

○田山貴紘氏 そうですね。

○小笠原一志氏 そのやり方さえしっかりわかれば使いやすくなって、若い人たちもどんどん、おしゃれなカフェに行って実際に買っていただいたりとかして、そんなサービスしているところないですよ、今のところ。

○田山貴紘氏 ないと思いますね。

○小笠原一志氏 無料で修理したりとか。どっちかというとお試しでお店で実際に味わったりできるのではないですか、そういうこともされているの初めてですよ。

○田山貴紘氏 そうですね。あと、ここ数年間で愕然としたのは、南部鉄瓶と聞くと皆さんいろいろを思い浮かべる方が多くて、あと熱源はガスとか木炭を思い浮かべる方が多くて、南部鉄瓶、いろいろ、いろいろないからだめだよみたいな論法が成り立ってしまっているの、それが愕然としたことです。南部鉄瓶というワードから連想されるイメージを変えたいなと思っているところで、いろいろ情報提供というか、情報発信をしていて、また宣伝なのですけれども、パンフレットの女性が写っているほうを見ていただくと、スマホをいじりながら、携帯電話をいじりながらコーヒーか何か飲んでいる様子の写真があります。僕らの鉄瓶はIHでも使えるのですが、伝統工芸品が日常にあって、自然な形で現代の日常にあるという、南部鉄瓶、こういう絵、あっ、私も使えるかなという、そういう論法に変えていきたい、そういったふうに情報発信をしているつもりです。

○小笠原一志氏 そうですね、これはデザイナーさんも上手。ビジュアルを使ってその辺をうまくやられていますね。ありがとうございます。

それでは、先ほどもお話ししましたがけれども、使いやすくなると多分、ちょっと抵抗あった方も毎日使って、地元の工芸に触れていただく機会もふえるかなと思って、そういう方がふえることを祈っております。

では、今後の目指す方向、それぞれ違うと思いますけれども、あとは今後の発展のためにやっていることをお話しただけるとうれしいです。

では、田山さん、続けてお話し頂いていいですか。

○田山貴紘氏 伝統工芸って、南部鉄器で申し上げますと、諸説あるのですけれど

も、1625年、私の父親が学んだところでは1625年から南部城下でつくっているという話なので、あと6年で丸400年なのです。やっぱり400年の積み重ねがこの価値のかなり真のところだと思うので、そういった意味ではそれが継承されていく、技術が継承されていくことがまず第一で、それがないとどうしようもなくなってしまいます。そこがしっかり担保されていくのが大事かなと思っているので、やっぱり若い職人、若い職人って僕が言うのも何かあれですけども、やっぱり若い職人がどんどん入ってくる状態をつくりたいなと思っています。そうするためにはしっかりと商売をしていかなければいけないなと思っているのです。

きょう持ってきた「あかいりんご」という、パンフレットにも載っていますけれども、宣伝ばかりしていますけれども、「あかいりんご」という鉄瓶に関しては結構安く、3万円台で販売しています。若手の職人が一切を、全工程を手がけるというようなもので、もちろんしっかりと品質はチェックしながらつくっているのですけれども、全工程にしっかりと携わることができると、職人の育成にとってとても重要で、成長がすごく早くなるので、そういった商品をつくったりしています。商売上も若手の職人が頑張っつてつくったものが売れるという状況って、やっぱり若い職人の給料を稼ぐ上でも大事なことなので、そういった環境もしっかりつくりながら技術の継承をしていけるようにやっていきたいなと思っています。

○小笠原一志氏 それこそ新しいお店をオープンして、今までやっていなかったことをやられていくと。それがうまく乗っていくといいですよ。

○田山貴紘氏 そうですね。やっぱり時代背景を考えるとなのですけども、30年前とか50年前より今の方が商売やり安くなっているはずですよ。本当に小さい片田舎でやっていることの情報を一瞬で世界に届けられるし、商品を送ろうと思っても今ではそういう輸送サービスもたくさんあるので、そういう意味ではやっぱり前の世代の人たちができなかったことが僕らはできると思うので、そういったところは新しくチャレンジしていきたいなと思います。

○小笠原一志氏 わかりました。

澤口さん、どうでしょうか。今やられていることとか、それから今後目指していかなければいけないところございますか。

○澤口光雄氏 目指す点では、私の商品だから買うというお客さんがふえてくれ

ればいいなど。実際そういう人もおります。その人のつくった家具を買っていくという。

○小笠原一志氏 それは、一回買われた方がもう一度同じ作家さんのを欲しいということなのですかね。

○澤口光雄氏 ええ。それぐらいですかね。

○小笠原一志氏 それは、しっかりつくられて、次のリピートをとということですね。

○澤口光雄氏 そうです。

○小笠原一志氏 日々同じことをやり続けていくということですかね。

○澤口光雄氏 はい。

○小笠原一志氏 わかりました。ありがとうございます。

藤村さん、お願いします。

○藤村真紀氏 うちの工房は私と父を含めて全部で5人で作業をやっております。30代から、父が一番上で70代なのですが、もう少し若い年代の職人さんも今後は仲間に入れて、伝統をきちんとつないでいけるようにしていきたいなと思っています。

○小笠原一志氏 いろいろ今後考えていかないといけないですよ。

○藤村真紀氏 そうですね。やっぱり漆器を使う方って、私見ると大体わかるようになってきたので、この人好きだというのがわかるのです。なので、そういう好きな方をもっとどんどん発掘していきたいなと思っています。

○小笠原一志氏 わかりました。ありがとうございます。

では、平山さん、どうにか岩手の工芸を使って全国にばんばん売りさばいていらっしゃると思いますけれども、さらに今後岩手の工芸界が発展するような取り組みなんか頭の中にあったりしませんか。

○平山貴士氏 もちろんこういう伝統工芸をお店という立ち位置でものづくりをすることは大好きなので、本当に僕がやっていることはシンプルなので、余り大それたことは全然考えていなくて、本当に好きなことをやっているというのに尽きるのですけれども、結果的にそれが岩手の伝統工芸だったり、そういうものの発展になればもちろんいいのですけれども、どちらかといったらそこを目的にしてやっているわけではないのです。こういう言い方はちょっとどうかと思われる

かもしれませんが、応援の仕方というか、それありきでやっているわけではないのですが、やっぱり岩手で、盛岡でお店をやっていると、たかだかうちは15年、春に丸15年になって、16年なので、伝統工芸の何百年という歴史と比べるとほんのわずかな期間しかやっていないのですが、その15年でもやっていると絡まざるを得なくなるというか、それがその土地で店をやっているということなのかなとは思っています。何となく今後の目指す方向についても、自分の店のことですら大きくしたいとか、そういう願望は一切なくて、自分が楽しくできて、自分とかかわりを持ってやってくれている職人さんも楽しく一緒にものづくりができる。それが本当に県内や県外のお客様にも、徐々にゆっくりでいいから広がってほしいなという感じですかね。

○小笠原一志氏 この間ちらっとお話ししたときに、木目が大好きだから、隠したくないから、それ塗らなくていいんじゃないですかみたいな話をしてもいいですかねみたいな。

○平山貴士氏 それあれですね、漆の話ですね。ちょっと今お隣なのであれなのですが、うちのお店はホルツとって、ドイツ語で木とか木材という意味なので、もちろんほかの素材も好きですけども、木は大好きなのです。漆、やっぱりハードルちょっと高くなってしまわないですか、何となく。そういった意味では、それこそあっちのほうへ、きょうちょっと漆のやつは持ってきていないのですけれども……

○小笠原一志氏 重ねコップ。

○平山貴士氏 重ねコップという……

○小笠原一志氏 半分漆塗ってあるやつ。

○平山貴士氏 そうですね。形状としては、普通に昔から食堂で出されるようなスタッキングができるコップなのですけれども、内側と上半分だけ漆で塗っていて、やっぱり漆の最大のよさは口当たりだと僕は思っているので、そのよさは生かしつつ、下のほうをちょっと敷居を低くというか、カジュアルにというか、そういうものとかも、なので、すごい技術、すごいものなのですけれども、そんなに構えるものではないのですよという、そういった意味での敷居の低さがある意味提案するのも僕の仕事なのかなと。それが今後のために何かつながればいいかもしれないですね。大丈夫ですか、それ。塗りたいですか、やっぱり。

○小笠原一志氏 このチームで何か1個プロダクトができたりするといいいのではないかなと思いつつ、その広報のデザインは私が担当するというのでどうでしょうかね。

○平山貴士氏 この会から何か1つプロダクトが生まれて、それを継承していくという。

○小笠原一志氏 そうなってくれるといいなと思いますけれども、こんな感じのまとめでいいでしょうかね。

私ちょっと考えていたことがあって、よくデザインって、パッケージデザイン、例えば東京の有名な方につくってもらえれば、ばんばん売れるとか思っていたら、しゃるクライアントさんが多くて、実は中身が一番重要で、そこも含めてトータルでアドバイスをしたりするのですけれども、ジャンルは違いますけれども、伝統工芸ですね、こちらもやっぱり中身がしっかりしているというところがあると思いますので、どんなデザインを起こしても多分売れると思うのです、正直。なので、グラフィックデザインとは違いますけれども、いいものをつくって、それをお客さんがレジまで持って行って、お金を払って、自宅に連れて帰ってもらうというところまで行動させるようなものづくりをしっかりしていけば、大丈夫なのではないかなと思います。一応若手のメンバーということで集まっていますので、今後の岩手の工芸界を引っ張っていただいて、こういう取り組みをまたさらにつくっていただいて、新しいプロダクトをつくったら私もちょっとお仕事いただけるかなと思いますので、ぜひ皆さん頑張ってくださいと思います。

それで、ちょっと時間が少ないのですけれども、お客様から使い方だとかその辺とかで、あとつくられているところでも何か質問などございましたら、そんなには受けられないかもしれないですけれども、お話しできる範囲内で質疑応答をさせていただきたいと思いますけれども、どなたかご質問とかございますでしょうか。特にないですかね。

では、お願いします。

○私は持っている鉄器の焼き物のプレートを使っているのですけれども、うっかり水気にさらしたままにして、一部赤っぽいさびがついてしまったところがあって、これって無理に落とさずにそのまま使ってもいいのか、余り強くこする

のはだめだと先ほどおっしゃられていたので、もう強くこすってしまった後なのですけれども、今後も使い続けるためにどういうふうにかバリーしたらいいのかというのがあれば教えていただきたいのですが。

○田山貴紘氏 何かを焼くプレートということですか。

○焼くプレートです。

○田山貴紘氏 基本的に水が大敵なので、水を避けるように扱っていただくのがいいと思うのです。使った後に乾かして、油を塗っておくのが、鉄瓶とかだとちょっと使い方違うのですけれども、焼くプレートであれば油とかを塗っていただくと水気を防げるので、そういった取り扱い方がいいと思うのです。

今少しさびられて、ちょっとこすられてということだと思うのですが、今赤くて、さびが進行しているような感じはありますか。特にないですか。

○さびは広がってはいないです。

○田山貴紘氏 使い続けていただいて、今お話ししたような取り扱い方をしていたら、恐らく使っていれば熱で、さびって2つあって、赤さびと黒さびがあるのですけれども、黒さびってそれ以上さびないさびだったりするので、使っている環境の中でさびがとまってくることはありませんので、だから日々使っていたら一番本当はいいのですけれども、多分毎日使うわけでもないと思うので、使ったら水気をしっかり飛ばして、油を塗って保管しておくというほうを続けていけば、恐らくそこから広がるということは余りないのかなと思います。金だわしとかで結構ガリガリやった感じですか。

○アルミホイルをくしゃくしゃにしたのでちょっと。

○田山貴紘氏 状態見ないと何とも言えないですけれども、使っていただくのととまることはあるので、使っていただくのがいいと思います。進行するようであれば、一回相談していただくのがいいと思いますけれども、一番は使っていただいて、水気を遠ざけてあげるために油を塗るといいのかなと思います。

○ありがとうございます。

○小笠原一志氏 ほかにどなたかいらっしゃいますか。

いらっしゃいました。お願いします。

○お伺いしたいことが、3点あるのですけれども、ものづくりをやっていて、あと物を売っている中で、それのおもしろさと、嫌になったことと、嫌になった

ときのストレスの解消法、3点教えてください。

○小笠原一志氏 それはお酒ですよ、違いますか。

これどなたに聞きたいかございますか。

○できれば全員にお願いしたいです。

○小笠原一志氏 では、こっちから、田山さん。

○田山貴紘氏 つくっているときと売っているときのおもしろさ、嫌になったこと、ストレス解消法。

おもしろさでいうと、ものづくりのおもしろさで言えば、僕、理系なのですが、僕らの仕事って鑄造だったりするのですが、鉄づくりとかもやっていたりするのは。化学反応だったり、あと漆を焼きつけて、ジュージュー熱をかけながら漆を塗るのですけれども、それも専門的な言葉で言えば重合反応というのです。化学反応だったりしますし、粘土とか扱っているそのあたりも科学的に考えたりしながらやっているとすごくおもしろくて、僕は鉄器のものづくりは細かく突き詰めて考えると、そういう五感をフルに使いながら科学反応とかを楽しむ遊びだと思っているので、そういう意味では一生技術としては求め続けられる仕事なので、終わりが無いという時点で何か楽しいなと思ってものづくりはしています。

売ることに関しては、これもさっき申し上げたとおり、さびるといふこととか、重いとか、そういうのを言われると僕もむきになって頑張ろうと思ってしまうタイプなので、そういった課題感があることのほうが僕は楽しいので、それを糧にして楽しんでいます。

嫌になったときのストレス解消法は、やっぱりお酒です。

○小笠原一志氏 同感です。

○澤口光雄氏 おもしろさという、毎日やっていることなので、これが普通なので……。

嫌になったこと。嫌になることは急ぎの仕事ですかね。急がせられて、こちらのほうもやらなければならない、あちらのほうもやらなければならない、パニックになってしまいますね。

対処法は、やっぱりお酒ですね。帰って、すぐビールあけて、ビールを飲む。それに尽きます。

○小笠原一志氏 平山君、お願いします。

○平山貴士氏 つくっているときのおもしろさ、僕は自分の手でつくりませんので、職人とのやりとりの中で、やりとりがおもしろいのですけれども、だからもちろん簡単な図面は書いて、あとは結構口頭で伝えることが多いのですが、最初の1次試作が半歩前をよこしてくれたときというか、その職人さんが、こっちの言っていることは全部満たしているのだけれども、どうせこの次こうなるんでしようというのを見越してやってくれる職人さんはすごいなと思います、本当に。そのとき、わあ、おもしろいなと思います。

売っているときは、自分でつくったものはおもしろいしかないですよ、売るのに。ただ、カラバリとか、サイズとか……サイズではないな、カラバリがよくあるのですけれども、自分が好きなものほど意外と売れないということはたまにあったりします。

嫌になったときとか、ストレスの解消みたいなのは、もちろん走るしかありません。マラソン、これに尽きます。

○小笠原一志氏 マラソン終わった後は飲むのでしょうか。

○平山貴士氏 マラソン終わった後は、大会の後とかはラン仲間が集まって、がっつり飲みます。

○小笠原一志氏 最終的には飲むと。

○平山貴士氏 最終的には飲むという。

○小笠原一志氏 藤村さん、お願いします。

○藤村真紀氏 おもしろさというところは、化学変化ってさっき田山さんおっしゃっていましたが、漆もどんどん表情、やっている作業の最中でも変わりますし、可能性がいろいろある、自由にやれるというところが一番おもしろいなと思います。

嫌になるのは、やっぱり数に追われる。50とか100とかの数をこなしていかなければいけないので、それちょっと嫌になるところでもあるのですけれども、意外と私、ストレス解消法何かと今試してみますと、黙々と手作業をしているとき、無になれる。これがすごく落ちつくのです。追われてはいるのだけれども、無の状態が時々あって、そのときすごく幸せな気持ちになります。

○小笠原一志氏 なるほど、何となくわかるような気がします。

どうでしょうか、こんな感じでよろしいでしょうか。

○ありがとうございます。

○小笠原一志氏 ありがとうございます。

では、時間結構押していますので、これで終了させていただきます。

本当に皆さん長時間ありがとうございました。なれない進行役で大変申しわけありませんでした。引き続き山崎事務局長様に進行をお返し致します。

では、お願いします。

○総合司会 ファシリテーターの小笠原様、座談会の司会進行、それからテーマに基づいたパネリストからのお話の引き出しと、それとまとめ役、本当にお疲れさまでございました。どうもありがとうございました。(拍手)

また、各パネリストの皆様からも、伝統工芸品についてのさまざまな取り組みとか、それから手入れ方法、職人としてのこだわりなど、ふだん聞けないお話を聞かせていただきまして本当にありがとうございました。

会場の皆様、ファシリテーターとパネリストの方々にいま一度感謝の拍手をお願いいたします。(拍手) どうもありがとうございました。

また、この工芸品フォーラムのご来賓の皆様やフォーラムを共催いただきました協同組合盛岡手づくり村様、ご講演いただきました関係団体の皆様、ご来場いただきました皆様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

この後は交流会でございますが、交流会はこの場所で引き続き行います。時間のある方は、引き続きご参加いただければと思います。座談会で聞けなかったことをパネリストの方々に直接聞いたり、名刺交換等、交流を深めていただければと思います。

それから、会場に、こちら、なかなか見られなかったと思うのですが、パネリストの方々がつくっていただいている作品等もございますので、この辺もぜひ見ていただければなと思います。

それと、交流会では鉄瓶で沸かした白湯を準備しております。こちらもぜひ、ふだんの水と2つ用意してございますので、飲み比べしていただきまして、いかに鉄瓶で沸かしたお湯がまるやかで味わい深いものか、ご体験していただければと思います。

これから椅子を片づける時間を少し頂戴したいと思います。5分ぐらいお時間

いただきまして、会場を準備いたします。その間、こちらに出て2階にあります展示資料室というものがあるのですが、そこを無料開放いたしたいと思います。ここは、盛岡市の産業についての展示資料となっております、南部鉄器や岩谷堂箆笥、浄法寺塗に関する展示もございます。ぜひこの機会にごらんいただければと思います。そこを一回りしてくれば、また出口が、こちらに戻ってこられますので、その間に会場の準備をさせていただきたいと思っております。

それでは、今から会場準備いたします。どうぞよろしく願いいたします。